

サンディエゴ留学雑感

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-06-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 味村, 一樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/176

サンディエゴ留学雑感

味村 一樹

1. はじめに

筆者は、武蔵野大学教員の海外留学制度により 2009 年 4 月から 2010 年 3 月まで客員教授 (Visiting Professor) としてカリフォルニア州立大学サンディエゴ校 (San Diego State University、以下 SDSU) の物理学科 (Department of Physics) に滞在しました。これに関する体験記ということで本原稿を簡単に引き受けてしまったのですが、日米の大学に関する比較調査／報告は組織や運営に関する専門的なものから留学を目指す学生向の一般的なものまで多数存在しており、何に関して書くかに迷いました。

ふり返ってみると、大学院を米国のワシントン大学 (Washington University in St.Louis、以下 WUSL) で、その後の研究員 (助教に相当する Research Associate) としてフロリダ大学 (University of Florida、以下 UF) で過ごしたほか、前職でも短期間ではありますが NASA や ESA に滞在して実験を行った経験があります。そこで、堅い話を避けてこの留学生活で記憶に残ったこと、困ったこと、こうすればよかったことなどを、以前の経験も織り交ぜながら、思い出すまま時系列に書くことにします。従って、個人的な感想となってしまうことをご了解ください。

2. 留学先を選ぶ

留学先についてあれこれ思いを馳せる段階も楽しい一時でした。本来は研究中心に決めるものかもしれませんが、それとは別に未知の文化に触れてみるのも留学の目的の一つだと考えていました。しかし、留学の 1 年ほど前から健康に問題が生じ、決まりかけていた東海岸の大学をとりやめ、気候、アクセス性 (友人) などから見直した結果、サンディエゴとヒューストンが残りました。サンディエゴに決めたのは、妻の一声 “サンディエゴがいい” でした。

振り返ってみると、楽しく不安なく過ごせたサンディエゴにして良かったと思っています。健康に不安がある方は、万が一に備えて保険、日本人の医師／歯科医の所在地、常備薬の入手なども含めて検討すべきでしょう。私の場合は、突然ですが歯の治療をしなければならなくなりましたが、事前に調べておいたので大事に至らず済みました。

3. サンディエゴ (San Diego)

サンディエゴ (以下 SD) については、概要だけを書いておきます。SD は西海岸最南端にありメキシコ合衆国のティファナ (Tijuana) の町に接した港湾都市 (米国の太平洋艦隊の本部がある) です。町の規模はロサンゼルスやサンフランシスコほどではありませんが

郊外も含めると 250 万人を擁する都会です。歴史的にみても、カリフォルニア・ミッション最初の教会（左下の写真）が建てられたこともあって、カリフォルニア発祥の地として観光名所となっています。

米国西海岸一帯は、一年中太平洋からの海風が流れ込み気温の変化が小さく、降雨がほとんどなく快晴が続きます。サンディエゴはその最南端にあり冬でも暖かく米国一住みやすい町として知られています。滞在期間中で雨が降ったのはたったの三日程度（11 月と 3 月）でした。

そんな気候の良さがサンディエゴに決めた理由の一つだと書きましたが、思い出すのは、この町の東に広がる Anza Borrego と呼ばれる砂漠地帯の風景です（右下の写真）。海岸から高速道路を 1 時間ほど走ると、ジョシュア（Joshua Tree）と呼ばれる薄気味の悪い木と雑草しか生えない荒涼とした Anza Borrego 砂漠が広がります。ここは町の明かりとは無縁の地で夜の満天の星は本当に見事です。英語で天の川を“Milky Way”（ミルクのような道）と呼びますが本当にミルクが輝いているような星空を見ることができます。週末には幾度か双眼鏡と水と携帯食を持ってでかけてみました。ここで初めて 45 度を超えるからからに乾いて気が遠くなる暑さを体感しました。



Mission Basilica San Diego de Alcala
サンディエゴの象徴。カトリック伝道の教会 札所 1 番といったところ。



Anza Borrego Desert State park への入り口と Joshua Tree。更に西へ行くと Salton Sea（海水の湖）と Joshua Tree National park がある

4. Weber 先生の研究グループ

お世話になった Fridolin Weber 教授はドイツのミュンヘン出身の方で、ここ 15 年はバルサーや中性子星と呼ばれている超高密度な星の内部状態に関する理論的な解析をしておられます。渡米後 30 年になるそうですが、相対論的な多体問題と呼ばれている分野の研究を続け、それらをまとめた 700 頁を超える大著を出版されたばかりでした。一つのテーマを徹底的に研究する集中力、執念に敬意を表するばかりです。

Fridolin（米国では名前を呼ぶのでこのように書くことにします）の研究グループは、数年前までは、リサーチ・アソシエイト（助教に相当）二人、院生が数名いる比較的大きなグループでしたが、2009 年の当時は、私の他、院生 2 名とカナダ・University of Calgary の

Qayed 教授がサバティカルで滞在していました。グループの研究は、コンピュータを使った数値解析が中心となっていたので計算結果を討論するグループ・ミーティングが不定期にありましたが、大抵のことはメールで連絡をとっていました。

私は、最初の数か月は Fridolin のレビュー論文を読み理論を理解することに時間を費やしました。これと並行して院生の Rodrigo と解析ソフトを使って数値計算を行いました。彼は、その年の秋には PH.D の論文を書き上げ、ドイツに職を得て出発しました。



右から左へ Qayed 教授、ご夫人、Weber 教授のご令嬢とご夫人、Weber 教授、筆者



Rodrigo Negreios. 彼は院生でした。現在はドイツ・GoetheUniversity

5. サンディエゴ州立大学について

サンディエゴ州立大学は、カリフォルニア州では三番目の歴史を持ち、学生数（院生も含めると）が3万人の州立大学です。その歴史のおかげで古い学科はメキシコ風に統一された建物にあり落ち着いた雰囲気を醸し出していました。2009年の LA Times によると競争率が7~8倍の人気があり敷居の高い大学とされていました。キャンパスが広いのでキャフェテリアやファースト・フード店が何か所もあるのは当然としても、寿司バーがあることには驚きました。

西海岸にある州立大学は東洋人が多いと聞いていましたが、この大学でも東洋人とヒスパニックの多さが目立っていました。

6. 物理学科

物理学科には20名ほどの先生と30名ほどの院生が在籍していましたが、外国人が1/3といったところでした。

学期が始まると colloquium（講演）が結構な頻度（月2回~3回）でありましたが、同分野の研究者とは講演後の食事会で自由に話をすることができました。

以前在籍した WUSL と UF の物理学科はここに比べると規模が大きく教授だけでも50名はいるような大学でしたので、物理学科としての一般的な weekly colloquia のほか、グループ単位で研究者を招き意見を交換していました。

WUSL では、私が論文を書き上げる頃に同分野の理論家を次々に呼び寄せてくれましたので貴重な意見を聞くことができました。



物理学科と天文学科。昼時はこの中庭で食事や休憩をとる学生や事務員で混んでいました。

7. 院生へのサポート、Teaching Assistant Ship と Research Assistant Ship

米国大学の理系の学科には、70年代にもかなりの比率の外国人がいましたが、その傾向が徐々に強まり現在では外国人なしには大学院が成り立たなくなっている学科もあると聞いています。(日本もその傾向にあるようです。)

物理学科はいい意味で昔から国際交流が盛んな学問領域であるので、留学経験がかなりの先生が多いと大学の恩師が言っていたことを覚えています。国際プロジェクトといえば素粒子物理の代名詞であったのですが、今後は他の分野も国際協力が必要となり、大学院で留学するのは当たり前となることも考えられます。

このような背景にあって留学生にとってありがたいのは、米国の大学には国籍を問わず応募できる Teaching Assistant Ship¹⁾ と Research Assistant Ship²⁾ がどこの大学にも用意されています。これらの奨学金は授業料免除(奨学金)も含んでおり、大学院生として生活ができるようになっています。私はこの制度があるおかげで米国の大学院に進むことができました。日本にも国立大学にはこのような制度がありますが、世界で通用する卒業生を出すためには私立大学もこのような制度を用意すべきであると思います。

8. 武蔵野大学に復活させてもらいたい制度

武蔵野大学には、私が留学する直前までコンピュータ学習相談室と呼ばれる組織があり、そこで学生アシスタントやティーチングアシスタントを育て新入生の授業の補助をさせていました。米国の TA に近い形で機能していたので、是非、復活させ発展させていただきたいと願っております。

9. 住について Settle Down

米国では転職などで新天地に赴き生活を始めるとき settle down という言葉を使いますが、私の学生時代、つまり 1970~80 年代の settle down は、アパートを決め、電話を引き、銀行の口座（チェックング・アカウント）を開設する事と同義でした。そのようなわけで、「アパートが決まればあとは電話一本で済む」と高を括って SD に到着しました。

ところが、2009 年に限り“アパートが決まれば”も“電話一本で済む”も通用しないことになってしまいました。

まず、アパート探しが、思いのほか体力と気力を使う事となったのです。その訳は、我々の SD 到着がイースター復活祭（2009 年は 4 月 12 日でした）と重なったため、翌日から大学の事務や housing office、それに公共の機関の一部が一斉に春休みとなってしまったからです。そのうえ頼みの友人も海外出張に出っていたので、アパートをインターネットと新聞の広告だけで探すはめになり予想以上に時間がかかってしまいました。安いホテルに予約を入れてゆっくり探そうとしましたが、観光都市 SD のイースターは、どこも満室となっております。高価なホテルに滞在せざるを得ませんでした。

日本から留学をする際にはイースターが何日になっているか（最大一か月ずれる）を確認し、それに重なる場合は、ホテルの予約などを少し長めにとっておくべきでしょう。

午前中は、インターネット・カフェで空き部屋を検索し、午後は予約をとり物件を見たのですが、休日のせいもあって予約が取れずアパート探しは捗りませんでした。広い町なので行くまでに疲れ果ててとんでもない物件に決めてしまいそうになったこともありました。即断は禁物です。良いと感じた物件でも、一度、宿に帰って落ち着いて判断するべきです。結局、“Available”の横断幕を見て立ち寄ったコンドミニウムにしました。決め手は、トロリー電停（Hazard Center という駅名でしたが、夜遅く出歩いても安全でした）と二つのショッピング・センターに徒歩 5 分という利便性でした。このコンドは、正面はヒルトン・ホテル、裏はサンディエゴ川に面していて年末にはアメリカを思わせる夜景（下の写真）を楽しませてくれました。夕食後のサンディエゴ川沿いの散歩や Borders 書店でコーヒーを片手に座り読みすることも楽しみでした。



住が決まれば、あとは、中古の家具屋でベッド、キッチンテーブル、ソファなどを購入すれば即生活できます。他に必要なものは garage sale で見つけると安くていいものが手に入ります。

次の予想外のトラブルは、電話です。最初に繋がる番号は、必ずとっていいくらい Automated answering machine が返答してきます。日本ではそれに対して数字を入力しますが、米国では音声で応答しなければなりません。'yes' か 'no' で返事をする場合はまだいいのですが、“Give me a key word.”と返答された時には閉口しました。通常の声の大きさを返答すると、必ずと言っていいくらい毎度 “I am sorry. I don't understand you.”と返ってきます。大き過ぎるくらいの声でないと認識できないのです。途中で諦めると最初からやり直しです。幾つもの質問を忍耐強くクリアして人が電話に出てくれるまで答え続けなければなりません。これはアメリカ人でも同じです。あちこちで電話に対して怒鳴っている人を見かけましたが、多分、Automated answering machine に向かって返答していたのだろうと思います。

10. 驚いたこと

この滞在で驚いたことがいくつかありますが、米国らしいのでスーパーのレジの簡素化だけを紹介します。

私は、食材や日用雑貨をカリフォルニア・ベースの Ralph というスーパーで買っていたのですが、そこではレジの半数にはレジ打ちの人がおらず、自分でバーコード・リーダーを通し、野菜などの重量測定をし、支払額を計算しキャッシュカードで支払いまで済ませられるようになっていました。self-checkout と言うそうですが、慣れると簡単で早いので、その列に並ぶようになりました。この方が多少の間違いがあっても人件費がかからないので安上がりだということなのでしょう。人件費をここまで削減する合理性に驚きました。いつの日か日本にも self-checkout が導入されるかもしれません。

11. 楽しかったこと—欧米人の遊びにける情熱

楽しかったことのなかでアメリカでなければ体験できなかったことを紹介します。7月4日は、アメリカ合衆国の独立記念日となっていて各地で盛大なイベントが催されます。その中でもロサンジェルスハリウッド・ボウルの野外コンサートは一見・一聴の価値があります。その日は、友人から聞いていた通りに夕食バッグを用意し、期待に胸を躍らせながら到着しました。プログラムは、前半はロサンジェルス・フィルの Light Classic、後半は John Fogerty のロック・コンサートでしたが、後半のロックバンドが始まるや否や老いも若きも総立ちとなって音楽の拍子に合わせて手をふり、腰をくねらせ、踊りながら楽しんでいました。フィナーレには舞台裏から花火があがり我々にとっても忘れられない一夜となりました。

このような催し物や、ディズニー・ランドのようなテーマ・パークやグランド・キャニオ

ンのような国立公園を訪れるたびに、彼らの余暇と遊びにかける情熱は、日本人が学ばなければならぬものだと感じました。

12. 2009年の出来事について

2009年は、オバマ大統領が就任した年です。保険制度の改革やGM援助のことで痛烈な批判を浴びていました。

記憶に残るのは、メキシコを発生地とするSARSの流行です。マスクを購入してSDに持って行ったのですが、当のメキシコ（SDから国境を越えたTijuana）ではマスクをしている人は一人も見かけませんでした。ましてや、SDの一般の人は呑気で全く無関心でした。メキシコや米国の一般の人は過剰反応している日本人を冷ややかな目で見ていましたが、人と人の距離が短い日本での対応は、米国の人には滑稽に見えるかもしれませんが、致し方ないと思います。

13. 終わりに

インターネットによって情報検索やメール交換が瞬時に可能な時代の留学の持つ意を考えると、やはり人や文化に直接触れることができることだと思います。

振り返ってみると、最初の3ヶ月単位は生活のリズムをつかむ期間、次の3ヶ月は観光中心の期間、そして研究が軌道に乗ってきた期間、最後の3ヶ月は仕上げと帰国準備の期間とアツという間に過ぎ去り、新しい文化に触れるという点では短すぎたような気がしました。

しかし、新しい友人ができたこと、また、大学院時代の友人と学生時代に戻って話すことができたこと、お世話になった先生や日本から訪ねてくれた武蔵野の卒業生と親交を深めることができたことは、日本では得られないひと時でした。改めて感謝いたします。

最後に、留学の機会を与えてくれた武蔵野大学と教養教育の先生方、快く受け入れてくれたFridolin先生にも改めて感謝いたします。

註

- 1) 20時間の学科授業の補助をすることが条件となっていますが、WUでは大学院1年目が教養物理の問題演習や試験の採点、2年目が学部3/4年生の授業の宿題の採点が仕事となっていました。実質10時間程度の仕事でしたので、学業に差し支えることはありませんでした。
- 2) 博士論文実験をすることが仕事でした。